



2004年1月、芥川賞受賞が  
決まり、慶幸する金原ひと  
みさん(左)と義実子さん。

## Hitomi Kanehara Biography

1983年 (0歳)  
児童文学研究者・翻訳家の金原瑞人氏の娘として、東京都に生まれる。

1993年 (10歳)  
小学4年生のころから不登校が始まる。

1995年 (12歳)  
小学6年生のとき、父親の仕事の関係でサンフランシスコへ。村上龍や山田詠美の作品を読み始め、小説を書き始める。

1997年 (14歳)  
中学時代も不登校。父親が大学で開く創作ゼミに参加し、定期的に小説を書き上げるようになる。

1999年 (16歳)  
高校を半年で中退。実家を出る。

2003年 (20歳)  
『蛇にピアス』がすばる文学賞を受賞。続いて、史上最年少で芥川賞を受賞。

2004年 (21歳)  
『アッシュペイビー』を発表。

2005年 (22歳)  
『AMEBIC』を発表。

2006年 (23歳)  
『オートフィクション』を発表。

2007年 (24歳)  
『ハイドラ』を発表。



『AMEBIC』  
集英社 1200円 (税込)  
パソコンの画面に現れた、至極残酷な現実。これを乗り切るのは私なのか、私ではない私なのか。孤独と希望の狭間で、「私」はそれを「她」に伝えようとするが……。自分を守るために、内なる自分のと戦いに読む想像を極く。

『蛇にピアス』  
集英社文庫 400円 (税込)  
18歳のルイは、顔面ピアスのパンク美。アマの二股に刺けを逃に興味を持ち、自分の舌も「スプリットタン」に改造していく。暴力とセックスと身体改造。肉體から流れる血や痛みが、現代を生きた若者の精神の痛みとなって溢ってくる。第20歳で芥川賞を受賞した話題作。

『オートフィクション』  
集英社 1365円 (税込)  
オートフィクション (自称異小説) を書き始める22歳の小説家、リン。夫を愛するあまり無気味な顔に。自ら結婚生活に嫌気がたつ。自分の結婚生活を求めて暴力とセックス。彼女の想像の扉がまよって来た過去を今もつづいていく。異世界の15歳の自分を語り、また最初から読みかかるとなる作品。

『アッシュペイビー』  
集英社文庫 440円 (税込)  
西人男にしか興味しない男。ネフとルームシェアするアヤは、新しい手を持つ編纂者の付帯を好きになる。アヤが求めるままにセックスするが、2人の距離は縮まらない。愛されたいと強く願うアヤは、自分を傷つけることで恋を維持する。究極の愛の証として結してはいいと願う。豪華の芥川賞受賞第一作。

『ハイドラ』  
新潮社 1260円 (税込)  
24歳の主人公・早苗は、有名作家高野、新編の筆名もがんであり、恋人、新編が読む体制を自分に課するうち、自分を従う身体に課された早苗は、指導しては出て出すという“痛み好き”に誘われ話す。この絶望的行動を通じて、人間の真実に書きおさすまよや夢見た感情をあまり出していく。



「スプリットタンって知ってる？」  
「何？ それ、分かれた舌って事？」  
「そうそう。蛇とかトカゲみたいな舌。人間も、あみいう舌になれるんだよ」  
男はおもむろにくわえていたタバコを手に取り、べろっと舌を出した。彼の舌は本当に蛇の舌のように、先が二つに割れていた。私とその舌に見とれていると、彼は右の舌だけ器用に持ち上げて、「蛇の舌の間にタバコをはさんだ」  
「……オオ、いい」  
「これが私とスプリットタンの出会い」  
「君も、身体改造してみない？」  
男の言葉に、私は無意識のうちに舌を縦に振っていた。

「蛇にピアス」より抜粋